

『妻田行幸(紀元二千六百記念)』 昭和 14 年 9 月 神奈川県教育會 松永参謀の書簡 永野家に所蔵

今般当地 行幸の儀に付 御面談致度儀有之候間書記の内一名当宿まで御差出有之度此段申入候也

14 年 4 月 13 日

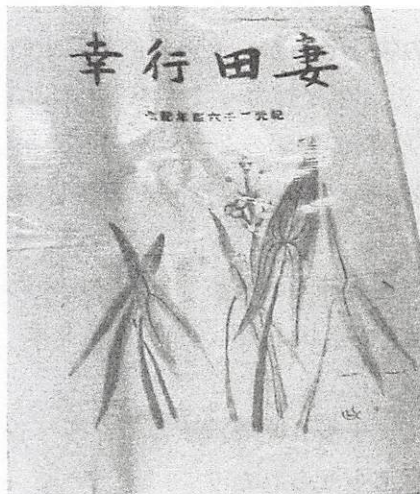
近衛参謀 松永 大尉

愛甲郡役所 御中

朱 書

前記ノ書状 13 日午後 5 頃厚木町萬年屋平兵衛方ニテ認メ郡長並書記共同人方ニテ処東京ヨリ来古畫屋茶市持参
スル品々一見中持参開封ス 黒田黙兵衛(黙耳か)書記面接ス其節行在所ハ妻田村永野茂宅ニテ可然旨内々話シ有之
乍今夕ヨリ宮内省官員並出張ノ上尚協議スベキ旨承ル也

但夜ニ入宮内少書記官足立其他縣官来泊ス翌 14 日厚木町妻田村上荻野村マデ見分ノ上□以テ妻田村行在所ニテ
可然旨決シ候也



東京横浜毎日新聞

4 月 26 日 聖上にはいよいよ来る 28 日午前 7 時 30 分の御出門にて相州厚木へ行幸あらせらるる旨仰せされ
岩倉右府、山縣、山田の両参議及び谷森内閣権大書記等には右供奉(ぐふ)を仰付けらるる また伏見宮を始め陸軍將
校方数名には御陪覽と命ぜられしと

4 月 27 日 近衛都督東伏見宮には近衛諸兵対抗運動審査官として去る 24 日相州厚木へ出発せらるるべきのと
ころご都合により同日は延引せられ、本日土屋参謀長と共に出発せらるる…又聖上の御乗馬ならびに御荷物等は昨
日より同地に回され御先着の官吏は本日より出発さるるよし

郵便報知新聞

4 月 27 日 ○明日ハ相州厚木駅へ行幸御発輩に付午前八時十五分に新橋停車場より別仕立ての汽車に乗御
あらせられ野村神奈川縣令ハ新橋まで奉迎さるる由

○近衛都督東伏見ハ厚木駅対抗運動の審査官にておハせば本日正午十二時に同所へ御先発なさるるよし

4 月 29 日 ○厚木行幸に付昨日午前 7 時 30 分赤坂仮皇居御出門にて同 8 時 5 分新橋停車場へ着御樓上に於い
て着時御休憩あらせられ同 15 分発の汽車にて御発乗遊バされり岩倉右大臣杉宮内少輔ハ同所まで奉送遊バされ御
陪乗ハ東伏見北白川の両宮山縣参議徳大寺宮内卿大山陸軍卿米田侍從長の方々まで神奈川停車場よりハ兼ねてお廻

しに相成りおる御馬車に召させられ藤沢駅にて御小休の後妻田までハ御乗馬なりと承わる

5月3日 ○厚木行幸の御模様を略記せん 聖上ハ去る28日午後7時ごろ厚木町の隣れる妻田村の行在所永野茂方へ着御あらせらる此の日ハ午後

頃より小雨ふり出で2時頃に至りて一層強く降りしきりしかバ藤沢駅よりの道路ハ泥濘のため御鳳輦(みくるま)を始め供奉の方々の車も輾(にじり)遅く甚だ困難なりしかバ供奉の方々ハ車を下りて甲斐がいし、草鞋を穿き雨を冒して歩行せらる御通輦の村落ハ何れも国旗を掲げ拝観の老若近郷近在より群集して賑やかなりしが雨のためにハ何れも苦しみたる様子なりし厚木ハ戸数5百数十戸の町にて愛甲郡中殷富(いんぶ?)の地なれど昨年12月の大火災にて家屋の建築未だ成らざる多し依て行在所は妻田村に定められしなりとぞ 夜に入り野村神奈川縣令が行在所へ伺候せらる雨未だやまねバ明日の天気如何あらんと思ひのほか早朝より晴れ渡りたれば29日妻田村の行在所を御発輦あらせられ上荻野村の第一天覧所及び尼ヶ寺原の第二天覧所に於いて近衛兵の約束對抗運動を御覧あり此の對抗運動の方略ハ南北の両軍に分かれ北軍ハ東海道大磯駅に陣を布き甲州路より進む南軍の脊後(うしろ)をどうしゅうせんとするを南軍ハ早く探知し急に兵隊を分遣して北軍を迎へ撃たんと進んで荻野村に至り両軍遭遇して開戦し南軍全敗して退く状を擬し演習全く終わりて12時20分頃御馬にて還御あり

此日午後妻田厚木の人民花火を打ち揚げ大風を飛翔して天覧に供す花火ハ尋常の物なりしが、大風ハ例年厚木町にて飛翔する物より一層張り込みし由にて同所下町のハ1100枚張(六間四方)にて万物生光輝の5文字を書し仲町のハ800枚張(五間四方)にて皓々如の3文字を書し上町のハ1100枚張(六間四方)にて駕鶴の2文字を書し天王町のハ800枚張(五間四方)にて旭日に鶴の図を書きしを天王町の下河原にて飛揚せしハ都人には珍しくありし30日ハ愛名村なる妙見山に設けたる天覧所へ成らせられ不期對抗運動を御覧せらる

此れが略ハ前日の再戦にて敗走の南軍ハ本営よりの援兵を得て其の勢力を復し津古久峠の嶮を抜き進んで南軍の本営に迫らんとす、依て此の夜下荻野村南端の地に前哨を配布し天明を待って進撃を図る状を擬し午前10時北軍敗走して演習を終わる

聖上ハ御馬ハ御馬にて妻田村へ還御ありて御餐を召し正午少し過ぎ頃同所御輦にて午後3時藤沢駅の行在所へ着御御一泊ありて一昨日午前7時御発輦にて前号の記し奉り如く天機うるハしく還幸あらせられたり

この新聞2473号は『妻田行幸』51～52頁に引用あり、新聞と行幸書では一部文言の相違あり

○ 右還幸の御途中四谷傳馬町一丁目御通輦の際一個の壮士がツカツカと儀仗兵の中を走り抜け鳳輦に近づかんと…直ちに巡査が取押さえられ酔狂人は谷水安次郎とい警察署へ拘引さる

東京横浜毎日新聞

4月30日 ○厚木より御還幸の後府下近在に於いて教導団生徒の大演習を天覧をあらせらるゝよし

○厚木行幸の記前号の続 28日午前9時半過ぎ程ヶ谷駅へ着御 金子傳右衛門方にて暫時御休憩あそばされそれより同処御発輦11時頃戸塚駅江島文右衛門方へ御着輦しばらく憩ハせ給ひて直ちに同処発輦正午過ぎ藤沢駅に着御 三橋嶺助方にて御昼餐(さん)と聞し召され午後1時同処より御乗馬にて御出発駅中を右に折れて用田街道へ出でさせられ用田村にて暫時御小休の後ち同処御出発それより1里余を進ませ玉ひ相模川仮橋際にて御下馬御歩行にて橋上より山水の景を覧そなハせらる、同橋向う詰めには妻田村の小学生徒数十名いづれも揃ひの羽織はかまを着し校名を記したる旗章をたてて奉迎し教官之れが指揮を掌り御通行の際路傍の整列して敬礼を行ひ聖上には同処より又また御乗馬にて同日御泊の妻田村へ向け進ませ玉ふ 以下次号に譲る

5月1日 ○厚木行幸記 前号の後28日午後7時過ぎ妻田村行在所永野茂方へ着御あらせらる妻田村は厚木町に隣りて戸数百余戸あり此の日正午過ぎより降雨あり2時頃に至りて一層烈しく藤沢駅より妻田村までの道路は泥濘甚だしくて為めに鳳輦を始め供奉官吏の車も通行の困難なるに依り供奉せ官吏はことごとく草鞋(わらじ)を穿(うが)

ちて歩しようやく7時過ぎより8時頃までの間に妻田厚木の両処へ着せられたり

当日の御道筋は鳳輩を拝観せんと近在近郷より老若男女とも夥(おびただ)しく出かけたりしが折り悪しく雨天にて大いに困難せしよし又た 愛甲郡長注1始め厚木妻田其他近村の 各戸長注2は相模川原に奉迎し殊に妻田厚木の両村は毎戸に国旗を掲げ日章の毬灯を懸け列ねて可なり賑ひたれとも雨天の爲め人民の遺憾一方ならざりしと厚木町は戸数5百6、70戸もあり住民は農よりも商多く且つ郵便局警察署病院等もありて愛甲郡中繁栄も地を占むれど客年12月9日の火災に罹り建屋は未だ仮普請のみなれば別に行在所とあそばさるべき家屋もなきに依り妻田村なる永野方を右に定めさせ玉ひしとぞ

さて聖上には行在所着御の後ち夜に入りて野村神奈川県令注3へ謁見を仰付けられ親しく当地の状況を聞き召され予て仰せ出でされし如くいよいよ翌29日は上荻野村へ成らせられて近衛隊の対抗運動を天覧あそばさるゝ旨御沙汰あり又厚木妻田の人民は対抗運動天覧の節煙火(はなび)を打ち揚げ且つ大凧を飛翔して天覧に供し奉らんと予て其の用意を為せしよりにてその大凧は厚木町の下町、仲町、天王町、上町の四ヶ町より一枚づゝをあぐることにし下町にては千百枚貼り(6間四方)万物光輝の五字を書し仲町にては八百枚貼り(五間四方)に皓々如の三字を書し上町にては千百枚貼り(6間四方)に鶴鴛の二字を書し、又た天王町にては八百枚貼り(五間四方)に旭日に鶴の駕する図を画きたるもにていづれも天王町した河原に於いて飛翔すべきはづなりと、もっとも当日は雨天なれば順延なすとのことなり。なほ対抗運動等の模様は後報を待ちて記載すべし。

- 厚木行幸~~行幸~~の記前号の続 29日午前8時30分妻田村の行在所より御馬に召させられて9時過ぐる頃上荻野村(妻田より凡そ2里余)へ成らせられ予て設けある同村字東村の第一天覧所に着かせ玉ひここに於いて近衛諸兵の約束対抗運動を天覧あそばさる此の対抗運動の方略は諸兵を南北の両軍に分ち阿武歩兵大佐南軍を指揮し黒木歩兵大佐北軍を指揮し、北軍は東街道大磯駅に布陣せる南軍の背後を衝かんと甲州路より進軍す南軍は之を探知し敵軍を要衝の地に迎え撃たんと欲し

午前10時金比良山頂にて火箭(ひゃ)3本を発射するを合図にまず歩兵一小隊急行して金比良社の山頂(上荻野村の東方にあり)を占め続て山砲2門を進め又同山の麓へ散兵を布置し以て本軍より進襲するの応援に備へしめ自他の諸兵は各々戦闘隊制を取り前進して荻野神社を距(き)る若干丁の地に到り俄然北軍の火撃に遭う依って直ちに散兵を以て開戦し尚捕進んで上荻野村の要所に拠り或るは進み或るは止まりて益々火力を猛烈にし野砲2門を荻野神社より東の方なる山の中央に進め斜めに北軍を砲撃することいよいよ熾(さか)んなり

北軍はしばし防戦せしも其の利あらざるを見、砲隊をして金比良社山頂に連続せる大鷲尾山(上荻野村の東南にして金比良社山頂より少しく高处に在り)の頂上に引き揚げ同処より金比良社山頂の南軍を砲撃す是に由って南軍大いに乱れ防戦する能はずして終に敗走し北軍の機に乗じて尾撃すること益々急なるに依り中荻野村の畑中に退走す

この時聖上には五(御)座を第二天覧所(金比良社山の中央に設く)へ移させ玉ふここに於いて南軍は防戦頗(すこ)ぶるつとむといえども支持する能はず依って地雷を設けて北軍の追撃を防ぎ而して全軍津古久峠(愛名村を距(き)る西南一里余)に向つて退走しここにこの日演習を了る時2に午後零時10分右天覧畢(おわ)りて妻田村の行在所へ還御あらせらる本夜は行在所に於いて同村人民より煙火(はな30尾)数本を打ち揚げ天覧に供したりき

翌30日は午前4時30分妻田村の行在所より御馬に召させられ凡そ一里余の里程なる飯山村を経させられて愛名村の妙見山々頂(愛名村は飯村山の西隣にして妙見山は愛名村に接し頂上まで6丁余あり)へ御登山遊ばされ此の日は不期対抗運動を天覧あらせらる該運動の方略は前日の続きにして南軍は昨日失敗を取りしといえども其の夜本営より援兵の到着するを以て大いに力を得津古久峠の嶮に拠りて防戦し機に投して攻勢に移らんことを勉め津古久峠の地形に沿いて愛名村、林村、の山間に前哨を布置し又た北軍は前日の戦争に勝利を得たるを以て勇氣

益々奮ひ一挙して津古久峠の嶮を抜き直ちに南軍の本営に迫らんとて前夜より露營し下荻野村の南端なる飯山村、古沢村より妙見山の北端に連続せる地形に沿いて前哨を布置し当日は暁天より進撃を始め北軍は右翼兵を以て前進し南軍に向かって大小銃を発射し南軍これに応じ両軍互いに散兵を以て交戦し午前 10 時頃に到り北軍は南軍の為に横撃せられて左翼兵大いに乱れる南軍機に投して烈しく攻撃し、北軍の敗れ走るを追撃し北軍終に全敗を取りここに於いて此の日の演習を了る。

聖上には右天覧の後ち御歩行にて三丁ばかり嶮路を下らせられ、それより御乗馬にて午前 11 時妻田村の行在所へ還御あそばされ御昼餐後近衛諸兵へ酒肴料を賜り直ちに同処御発輦御順路を用田村の伊藤孫右衛門方へ着御しばらく御小休あり同家は往年東照権現の旅寓とせし所にして今に其の屋宇を存せり、それより同処御発輦午後 3 時過ぎ藤沢駅の行在所へ着御あらせらる翌 5 月 1 日同処御発輦御順路を戸塚、程ヶ谷の両駅にて御小休あり神奈川停車場へ着御午前 11 時 50 分同処発の臨時汽車に召させられ新橋停車場へ着御直ちに仮皇居へ還幸あそばされたり 『東京横浜毎日新聞』の記事は『武相自由民権史料集第五巻第 4 編地域指導層の諸活動（下）』を参考

『荻野村事務報告書 大正編』

大正 4 年 11 月吉辰ノ日ヲ占シ御即位ノ御大典ヲ挙行セラル村民一同ハ荻野神社々前ニ参集シ、謹ンテ聖寿ノ万歳ヲ奉祝シ…明治 14 年 4 月 29 日明治天皇近衛兵對抗運動御統監ノ為メ本村ヘ行幸アラセラレ御野立所ニ充テラレタル地ヲ永遠ニ記念スル為メ大正 4 年 11 月 10 日村内 2ヶ所ニ建碑ス

『妻田行幸(紀元二千六百記念)』 昭和 14 年 9 月 神奈川縣教育會

天覧所 中荻野字 子ノ神 金比羅社の鳥居脇 揮毫者 加藤政福 荻野小学校校長 大正 4 年 11 月 10 日
上荻野字東 撰文と筆者 村長三橋泰治郎 大正 4 年 11 月 10 日

石井廣吉(安政 6 年生まれ)荻野神社にて語る

陛下が御昼食を召し上がられるので、大釜へ湯を沸かす役を仰せ付かったので、普通のものは勿論近寄ること出来ないし金比羅様への参詣も一時交通止めになった、僕は特別で水を花上又七さんの家の井戸水を使用した。陛下の御食事を拝すことは出来なかったが、野村知事が左の土手のところで御弁当を食べて居られたのを記憶して居る。

陛下は御馬で御成り遊ばされ別に御乗換の白馬も用意されてあった、それからこちらへ御出になり 11 時頃御着になる一番先頭に警視總監の様な人が馬上豊かにやって来たのを覚えてる、陛下御野立のところには青いテーブル掛けをかけたテーブルが一つ置いてあり 陛下は望遠鏡で演習の状況を御覧あそばされた、その時護摩堂へ備付けてあった大砲からドカーンと大きな音を立て、空砲をはなった時には僕は臆をつぶした、沿道の農家では日の丸を書いたホーズキ提灯を掲げて奉祝し沿道には盛砂をして奉迎した、いまでもその時の提灯が残っている、これは良い記念物だと思ふ

『明治・大正・昭和のふるさと荻野』天利茂義(明治 24 年(1891)上荻野生まれ)より

私のおふくろは明治元年(1868)生まれ、明治 14 年明治天皇がこられた時、妻田の永野邸へ花束を持って行ったという、袴をはいて新宿の辰巳屋の娘さんと一緒にと言っていました。

『妻田行幸(紀元二千六百記念)』 昭和 14 年 9 月 神奈川縣教育會有

演習に関する縣通達

丙第 74 号

愛甲郡役所

近衛諸兵本月中旬屯営出發(歩兵八來ル 13 日出發)行軍演習トシテ別紙宿泊表之通管内經過或ハ滯在其林地形ニ応ジ諸種之演習ヲナシ空砲発火可致旨通知有之候條予テ沿道町村ヘ通達致シ諸般不都合無之様注意可致此旨相達候事

但陸軍旅籠料之儀ハ定限有之候條素ヨリ尋常一般ノ旅客ト同一スルニ不及雨露ヲ凌キ飢餓ヲ免ルゝマデ相足り候
間陸軍旅籠料定額貳拾貳錢已内…町村へ諭達

明治 14 年四月十三日 神奈川縣令 野村 靖

近衛歩兵第二連隊春季長途行軍宿泊及滞在地

第一大隊

第 1 日 田無駅(宿) 3 日 青梅町(宿) 5 日 丹波山村(宿) 6 日 猿橋駅(宿)

第 7 日 上野原駅(宿) 9 日 吉野駅(宿) 10 日 上荻野村(宿) 11 日から 19 日同前

同 20 日 府中駅(宿) 21 日 帰京

第二大隊

第 1 日 白子村(宿) 2 日 川越町(宿) 4 日 松山駅(宿) 5 日 飯能駅(宿)

第 7 日 青梅町(宿) 8 日 八王子駅(宿) 10 日 上荻野村(宿) 11 日から 19 日同前

同 20 日 溝口駅(宿) 21 日 帰京

歩兵第二連隊

第 10 日から 16 日 上荻野村滞在 16 日午後仮説敵編入ノ兵員上荻野村ヲ発シ中荻野村ニ至リ泊ス

第 17 日約束対抗運動畢(おわ)リテ第一大隊ハ下荻野村第貳隊ハ伊勢原町ニ至リ泊ス

第 18 日第一大隊ハ下荻野村近傍 第貳隊ハ富岡村近傍 露営 19 日厚木街泊 20 日府中、溝口泊

騎兵中隊

第 14 日～16 日 上荻野村滞在 第 17 日約束対抗運動開始ノ期ニ先ツ仮説敵ニ属スル兵員上荻野村ヲ発シ
中荻野村ニ至リ仮説敵ニ合シ此運動畢(おわ)リ北軍ニ属スル兵員ハ下荻野村ニ 南軍ニ属スル兵員ハ伊勢原町
ニ至リ泊ス 第 18 日北軍ニ属スル兵員ハ下荻野村近傍、南軍ニ属スル兵員ハ富岡村近傍 露営

第 19 日厚木街泊 20 日厚木発帰營

砲兵大隊・工兵中隊

第 15 日～16 日 中荻野村滞在

第 17 日約束対抗運動開始ノ期ニ先ツ仮説敵ニ属スル兵員ヲ除ク外中荻野村ヲ発シテ上荻野村ニ至リ北軍ニ
合シ此演習畢(おわ)リ北軍ニ属スル兵員ハ下荻野村ニ 南軍ニ属スル兵員ハ伊勢原町ニ至リ泊ス

第 18 日北軍ニ属スル兵員ハ下荻野村近傍、南軍ニ属スル兵員ハ富岡村近傍 露営

第 19 日砲兵大隊・工兵中隊厚木町泊 20 日厚木発 野砲中隊ハ東海道ヨリ、山砲中隊・工兵ハ溝口村へ帰
營

宮内省侍從武官府記録要旨

明治 14 年 4 月行幸ノ件

近衛師団ノ演習天覽為行幸被遊 属從セル主ナル者左ノ如シ

伏見二品親王 北白川二親王 岩倉具視 山縣有朋 宮内大臣 侍從長以下侍從其他

演習ニ出場セル部隊及人員

近衛歩兵第二連隊・重砲兵第二大隊・野砲兵大隊・騎兵中隊・工兵中隊 合計 將校 118 人、下士 335 人
兵 2,144 人

『明治天皇紀』宮内庁編 (1968 年から 1977 年)

28 日、これより先近衛兵第 2 連隊・同騎兵 3 小隊・同砲兵大隊・同工兵中隊及び近衛歩兵第一連隊一大隊を
して、相模國愛甲郡荻野村・同愛名村付近に於て春季小演習を行はしめらる、23 日演習を開始す、仍りて是の日

天覧のため、午前7時30分能久親王及び参議山縣有朋・宮内卿徳大寺實則・宮内少輔土方久元・侍従長米田虎雄・御練兵御用掛岡田善長・同大河内正質等を随えて御出門、8時15分汽車にて新橋を発したまふ、右大臣岩倉具視・宮内大輔杉七郎等奉送す、

神奈川にて馬車に移乗したまひ、保土ヶ谷・戸塚を経て藤沢御餐所に著御す清浄光寺住職大教正他阿尊教の天機を奉伺せるに謁(えつ)を賜ひ、騎馬にて発したまふ、近衛都督嘉彰親王用田村にて奉迎す。

相模川の仮橋を渡らせられ、午後7時10分愛甲郡妻田村に著御、行在所(永野茂の家)に入りたまふ、是の日終日雨やまず、泥濘深くして供奉の臣僚頗る困難せしが、迎拝の士女いたるところに群集せり、又妻田村民等、燎火を路傍に焚き以て通御に便す、是の夜嘉彰親王、天覧對抗演習の諸兵配置並びに地理等を奏聞す、根拠史料 記載

29日雨やみ漸く霽(はれ)る、午前5時起床したまふ、侍医例のごとく候せしが拝診を聴したまはず、8時30分騎馬にて妻田村行在所を発し、9時30分上荻野村字東の演習御覧所に著御、ついで荻野村字子ノ神の著御に移りたまふ、是の日の演習は、南軍諸隊を仮設敵とする北軍の攻撃演習にして、北軍は大磯に屯し、甲州街道を前進する南軍の背後を衝かんとす、南軍之れを探知し、兵を分かち北軍を口撃せんとし、進みて荻野村に到りて開戦するものとす、両軍奮戦数刻、南軍ついに力つきて敗走し、午後1時停戦の令下る、2時30分行在所に還幸す、是の日厚木町民等相模川原に於いて方五間乃至六間の紙鳶を飛ばし、また妻田村民烟火を揚げて歡慮を慰めたてまつる、神奈川縣令野村靖・同縣書記官等天機を候す、仍りて謁(えつ)を賜ふ、根拠史料 記載

30日 午前2時30分御起床、4時30分騎馬にて行在所を発し、愛名村高松山に於いて演習を天覧あらせらる、是の日の演習は不期對抗演習にして、北軍は歩兵二大隊・砲兵一中隊・騎兵一小隊を以て編成し、南軍は歩兵一大隊・砲兵一中隊・騎兵二小隊・工兵一中隊を以て編成す、5時30分演習を開始し、北軍攻勢を取りて徐々に南軍に迫り、南軍諸兵を要処に布置して北軍の進撃を候つ、両軍の砲火漸く熾(さかん)にして戦闘酣(さかん)なるに方り、北軍の迂回兵忽然南軍の右翼を襲撃す、是に於いて戦況一変し、第一戦敗色を呈するに至れり、時に8時30分、停戦の令下りて各々兵を収む、

近衛兵の連合野外演習を始めて行はせらしは明治6年4月にして、下総國習志野原に幸して之れ行ひたまへり、ただし徴兵令実施後召集編制せられたる近衛諸兵の連合演習は、今次を以て嚆矢と為す、故に其の兵精、其の氣壯、殊に両軍の進退能く機宜に適し、就中砲銃発射の緩急に至りては實に間然する所なかりしと云ふ、酒肴料を将卒に賜ひて十時前行在所に還幸し、近衛都督嘉彰親王以下将校をを召して謁を賜ふ、又宮内卿をして、行幸に際し力を道路修理等に尽せるを嘉したまふ旨を、愛甲郡長・同郡書記、および厚木町・上荻野村外九箇村の各戸長・筆生等に伝へしめ、午後一時騎馬にて妻田村を発したまふ、嘉彰親王奉送して相模川畔に到る、4時20分藤沢に著御、

参考追加注

聖上 明治天皇 1852年(嘉永5)生まれ15歳ほどで即位、父は孝明天皇で37歳で1867年に没

伏宮 貞愛 (安政5年(1858)生まれ、伏見宮邦家親王の第14皇子、明治10年の西南戦争出征を願ひ山縣有朋に随行鹿児島まで戦う、

東伏見宮 (小松宮) 安政5年(1858)生まれ 慶応3仁和寺宮嘉彰親王と名乗り、戊辰戦争では奥羽征討総督として指揮する。明治3年(1870)に宮号を東伏見と改め。佐賀の乱、西南戦争には旅団長として出征す、明治15年小松宮と改称

大山陸軍卿 天保13年(1842)生れ 薩英戦争に従軍、戊辰戦争、西南戦争に従軍7年フランスに留学13年に陸軍卿に

北白川宮能久親王 弘化4年(1858)伏見宮邦家親王の第9王子、戊辰戦争時幕府側に付彰義隊、奥羽列藩同盟の仙台に赴く、蟄居伏見宮預かり、明治5年北白川宮を相続、明治10年ドイツから帰国陸軍に勤務

野村神奈川縣令 当地の状況を聞し この件は？(明治13年6月7日 県令 国会開設建議の件諸君のご意見拝聴仕度 出港下され)

(郡長 中丸稻八郎 上荻野村戸長 神崎正蔵 荻野村戸長 三浦政憲 注土屋) 追記『明治天皇紀』の根拠史料の中に北條氏恭私記